

腐った痛みと、  
過ぎた重荷



原作 フランツ・カフカ  
脚本 岡部 竜弥  
協力 駆け付け妻三杯

想定（執筆時の想定なので無視しても大丈夫です）

大道具 四畳半一間の部屋を再現した具象舞台（舞台自体は広くとってそれを照明で

区切るのもありかもしれない）

照明 カーテンを閉め切っているの、室内は薄暗い。

効果として照明を使う際は、そのベースとのギャップが皮肉に映るように

音響 照明同様、生活音はリアルに。効果を狙った音響はデフォルメを利かせて。

衣装 具象的なもの。季節は想定していない。

小道具 具象的なもの。それらをシーンによっては見立てとして使う

宣伝 フランツカフカの「変身」が原作であることはあまり前に出ないようにしたい。

役者 ハイテンションとローテンション——言ってしまうと躁と鬱——それぞれを

どう描くかが肝要。執筆時点ではハイテンションをフィクショナルに、ロー

テンションをリアリティックにする想定。（逆にしても効果はありそう）

演出 だんだんと時間の経過がゆったりしていく

脚本 セリフは、ストーリーラインや構成をリスペクトしていただきるのであれば

ある程度変更してもらってもかまわない。シーンに関しても同様。

## 【一】

佐竹雄一郎は改造人間である。

私を改造した「社会」は悪の秘密結社である。佐竹雄一郎は己が心身の平和のため外界と戦うのだ！

どうも、始めまして。僕の名前は佐竹雄一郎。

年齢は23歳です！

23歳です！

23歳です！

性別は男です！

男です！

男です！

身長は176cmです！

176cmです！

176cmです！

体重は65.5kgです！

65.5kgです！

65.5kgです！

そして見ての通りのヒーローです！

ヒーローです！

ヒーローです！

23歳

男

1.76  
cm

65.5kg

の

ヒーローです！

ヒーローです！

ヒーローです！

僕のことを。この、佐竹雄一郎というヒーローを知ってますか？  
……まあ知らないでしょうなあ。知らなくてもしょうがありません。  
なんせヒーローと言っても僕が守っているのはこの僕の部屋だけなんですから

その場が四畳半の部屋だということがわかる

僕はこの、四畳半のヒーローなのです

四畳半、約7.29㎡の部屋を余すことなく守っています。

汗などが染みついた万年床

本棚に所狭しと押し詰められた本

優しい明りの白熱電球

それらすべてを、日々押し寄せてくる悪の組織から、身を挺して守り切っているのです。

ああ危ない！

男、なにかからの攻撃から身を挺して守る

ふう、危なかったさあ下がっているんだ。ドラゴンボー全42巻  
日々こうやって――

男、なにかからの攻撃から身を挺して守る

なあに、心配ご無用さ。スラムダンク全31巻  
邪魔が入りましたがこうや――

男、なにかからの攻撃から身を挺して守る

君にケガがなくてよかったよ。ふたりエッチ既刊92巻  
とかく、僕はこの四畳半を守るヒーローなのです。

日曜朝十時のヒーローたちだって世界を守ると言いながらも守っているのは  
実質日本のみ。

何でもありの虚構の世界でそれが許されるのなら、現実世界で少しスケール  
ダウンしようとも、許してもらえるでしょう

イメージは仮面何某。虫をモチーフにしたヒーローです。

それでは皆さんご唱和ください。

へ・ん・し・ん

## 【二】

まあ、ヒーローと言えど、別に何かしらの特殊な力があるわけではありません。

幾トンもの威力のあるパンチやキックなんて放てませんし、卓越した頭脳があるわけでもありません。そりゃあ、現実ですもの。

ならば何が僕をヒーローたらしめているのか。

……それは、心です。

心です。精神です。メンタルです。

一市民がおよそ持ちえない、超人的な心こそが、僕をヒーローたらしめているのです。

…皆さんが思っていることはなんとなく解ります。

「……は？」

まあまあまあ、そう思うのも仕方ありません。

心なんて目に見えない物についてあーだこーだ言われても、全然ピンとこないでしょう。

しかもそれを言っているのが、見るからに頼りなさそうな男と来てる。

ならば、こういうのはどうでしょう。

僕がこうやって、ヒーローになった経緯を話して、そこから、僕のこの心が、どれくらい超人的なのかを理解してもらおうというのは。

……どうやら、皆さん「ぜひ」とのことです。

佐竹雄一郎、深呼吸をする。

小学校2年生、この時の僕はまだどこにでもいるような男の子でした。

過去

えー、また鬼ごっこ？ サッカーは？

ボール？ いや、無いけどさ。ハルトくんちに行けばさ……

えー、うん……

……最初はグー、ジャンケンポン！！

佐竹雄一郎、じゃんけんに負ける。

うわゝ、鬼だゝ。

じゃあ、数えるよ！ いーち、にー、さーん、よーん

あ、エレベーター無しね！！

「走り回るのがイヤだから」ではなく、「自分を見て誰かが逃げると、逃げてるとき一人ボッチになるのがなんだかさみしいから」という、なんとも情けない理由で鬼ごっこが嫌いだった、でも友達に言われると断ることもできなかった、そんな普通の男の子でした。

はい、タッチ！ 次ハルト君が鬼ね！！

懐かしい〜！

あ！ あそこでハルト君とタケシ君が、バリアが有効かどうかで本気の喧嘩をしています。

手が出んとする勢いです。あ、出ました。タケシ君がハルト君のボディに二発入れ、顔のガードが開いたところに一撃入れました。と、思ったらそれはハルト君の狙い通りだったのか、そのまま腕を引っ張ってグラウンドに持ち込みました。

……今考えると小学生らしからぬ格闘センスだ。

……とても懐かしい。

あ、ハルト君、手放して。もうタケシ君、意識ないよ。

何も考えずに友達と遊びまわる放課後の2時間が、実は一番自由なのかもしれない。

高々十数年前のことなのに、なんだかとっても昔のことのように思えます。

町内放送で17時の音楽が鳴る

…ああ、あのさ、今日歩いて帰らない？

ほら、今日鬼ごっこでめちゃくちや走ったしさ。

走ってついていくのしんどいし……

ああそっか、うん、うん。

佐竹雄一郎、走って自転車についていこうとしたが、息が切れておい  
て行かれる。

ああ、ごめん。先帰ってて。

佐竹雄一郎、息を整えながら話す。

僕が小学校に上がるときに妹が生まれたんです。

だから、そっちにお金がかかるからってことで自転車とかそういうのはあん  
まり買ってもらえませんでした。

まあでも、そういうのが全然気にならないくらいかわいい妹なんですよ。こ  
れが。

ひかりっていうんですけど、もう、もうめちゃくちやかわいくて。

このころなんて言葉を覚えたばかりなもんですから「あうう」って感じで、  
あう、もう！あう、もうー！！

佐竹雄一郎、愛しさに身もだえする

ただいま。

ああ、ひかりただいま

見てください！！このぱちくりした眼（まなこ）！ぷくーとした頬！赤  
ん坊特有のおちょぼ口に、ふっくらした鼻！！それらが完璧なバランスで配  
置されているんです！まるで福笑いの神プレイだ！

ほら、ひかり、お兄ちゃんにただいまのハグをしてくれ！



佐竹雄一郎、佐竹ひかりに触れようとするが母から「手を洗ってき  
て」と言われ止まる

……あ、うん！

ひかりが雄一郎の足にしがみついてくる

ああっちょひかり。ごめん。放して。お兄ちゃん手洗ってこないといけない  
から。

（母に向かって）触ってない！触ってないからね！！

結局足にしがみついたひかりを引きずりながら、手洗いを完遂しました。  
女々しくてのPVみたいだったな、と。今になって思います。

いやあ、戻りてえ。このころに。でも、戻れないのが尊いわ。

ん？というかあれだな、それなりにいい記憶ではあるけど、僕がヒーローに  
なる経緯とはあんまり関係ないな…

いったん小学生の時の話止めます！！

ええっと、じゃあいつ頃の話を……

ノックの音が響く

…なに？

ああ、うん。

…部屋の前置いてて。

うん。ありがとう。

ええ、じゃあ次は中学あたりの話とか

佐竹雄一郎、深呼吸をする

【三】

だいたい中学二年生のころ。  
中学で僕は、帰宅部でした。

これまでの例に漏れず、我が家は妹中心の生活だったので、例えば両親が二人とも用事で家に居られない時とか、そういった時に妹を見てやるために、自然とこうなりました。

ほんのちょっとだけ……バスケットとか？そういうのをやってみたかったという気持ちもあるにはありましたが、まあ、そんなもの妹のことを考えたら屁でもありません。

学校のチャイム

HRが終わったようだ

ありがとうございました。

佐竹雄一郎、同じクラスの人から声をかけられる。

ああ！ごめん！今日家に親いないから。うん、妹見てないと。ごめんごめん。  
じゃあ、明日。

雄一郎、帰路につく。

（呟くように）ひかりのためならなんのその♪

雄一郎、家に着く。

ただいま！

と帰宅するさま手洗い完了。

このころになると僕の兄としての振る舞いも板に着いたもので、帰宅してから即座の手洗いをもはや反射のレベルで済ますことができるようになってしまった。

あとはピアノの習い事から帰ってきたひかりの相手をできるように、学校の宿題を一気に終わらせます――

ひかり、帰ってくる。

あ、ひかりただいま――

仕方がない。後回しだ――！

冷蔵庫に、ひかりのおやつあったよ。

ひかり、冷蔵庫に向かう

あー、手洗ったー？

……ダメだって。おやつは手洗いうがいをしてから。

……うん、よろしい

ひかり、手を洗いおやつを持ってきて食べ始める。

雄一郎、その姿を見て満足そうに頷く

今日、どうだった？ あ、ごめんね食べてる途中に。

おお、すごいね。今度兄ちゃんにも聞かせてよ。

えー、いいじゃん。

あー、でもあれだよ？ ひかりが練習してる時の音、兄ちゃんの部屋からも聞えるんだよ？

ははは。ね、だから。どうせだったら直接聞かせてよ。

数回押し問答が続けたのち、ひかりの了承を得る

やった！ ありがとね！

## 場転、現在

まあ結局、聞けず終いなわけですが  
なんともまあシャイな妹でして……

まさかコンクールを見に行くことすら拒否されるとは。恥ずかしがり屋さん  
め。

いやあ、聞きたかった〜！

男、布団の上うつぶせに倒れる。

少ししてもぞもぞと仰向けになる。

今までの様子とは違ってひどく無気力なように見える。

ああ、体が重い。いや、重いというか、力が入らない。なんか、こう、ヒーローでいるために必要な代償？ 的なものなのか、定期的にこういう感じになってしまふんですよ。

しかし、心配ご無用。こういう風に体になってしまった後は、決まって、心が強くなるんですよ。これを繰り返して、今のような心の超人になったというわけです。

しばし待たれい。

男、しばらくぼうっと天井を見ている。

――あ、ごめんなさい、強くなるのには少しだけ時間がかかるんですよ。

男、ぼうっと天井を見ている。

こういう風になる度に寝転がって妹が大勢の前でピアノの腕前を発表している姿を想像します。

残念なことにひかりは中学校に上がるときにピアノをやめてしまったので、どう頑張っても妹のコンクールでの演奏を聴くことはできないのです。

だからその慰みに、十数年たった今でも、こうやメロディを頭で奏できるので。まあ、これはこれで楽しいものですよ。

妹が弾いているピアノの音を想像しながら、そのメロディを口ずさむ。

しばらくぼーっとする

あれ？今日はやけに鮮明に想像できるな。

雄一郎、より音に集中する

…ああ、これは実際に今、下で弾いているのか。

思いつくように止まりながら弾いているのを聞くに、多分、手遊びで引いているでしょう。ピアノ、まだうちにあったのか。

あ、やべ。泣きそう。

四畳半を守るために日々すり減らしているこの心身に、めっちゃくちや染みる。

…お？来た来た！！

雄一郎、体をもぞもぞと動かし（気持ち悪い、何か甲殻を持った生き物がうごめくような音）、しばらくして弾みをつけて立ち上がる。

今心が少し強くなりました

あ、失礼。

雄一郎、変身ポーズをとる。

へ・ん・し・ん

成長した時は気持ちが高ぶるので、いつもこうやって「変身」のポーズをします。

せっかく心が一回り強くなったんだからということ。

まあ、別に変身したからと言って解除もない、というかできないので、なんかこう、心持ちということ。

【四】

雄一郎、飛び跳ねたりして体を動かす。

見てくださいよ、この快活さ。

体こそ強くなつてはいないものの、心が及ぼす影響は馬鹿になりません。体が絹のように軽く、今ならなんでもできそうです。

雄一郎、布団に頭を突つこんで叫ぶ。

こんなに大きな声も出せるんですよ！

ピアノの音が止まる。

少ししてノックの音が響く。

あ、うん。ごめん。

あ、あのさ、なんか買物とかさ、行ってこようか今日僕調子がいいからさ。

あー、うんわかった。部屋にいまーす。

危ない危ない。気分の高揚に浮かされて危うく自分の使命を忘れるところでした。

僕は、「この四畳半」の、ヒーローなんです。

そんなヒーローが、外に出てどうする！！

（布団に頭を突っ込んで）守るべき、市民のみなさんごめんなさい！！

強いノックの音が響く。

ごめんごめん。

あ、そうだ。

雄一郎、部屋の前に置かれていた食事を取ってくる。

いただきます！！

雄一郎、「ああ、うまい」と言いながら食事を取り始める

いやあ、心が強くなり始めてからというもの、甘い味付けが好きになっちゃって。

まあでも、あのヒーローもモチーフは虫だし、虫といえば甘い味だし、らしくなったと考えたらいいでしょういいでしょう。

あ、でもだとしたら、このご飯は昆虫のエサということになるのか？

……それは作ってくれた親に失礼だ。前言撤回。ごめんなさい。

虫関係なく。趣味嗜好として、甘い味が好きになりました！

雄一郎、一気に食べ終え（実際に一気に掻っ込んだくらいの時間を使

う）「ご馳走様」と手を合わせる。

その後、食器を外に出して、わなわなしながら帰ってくる。

で、あれか、これの一回目。つまり、ヒーローになったのはいったいいつかって話か。

うーん。いつだろ。

雄一郎、わざとらしくうんうん唸る。

雄一郎、疲れたようにふっと息を吐いて思い出す。

確か、妹のコンクールが終わった時だ。

過去

雄一郎、家で一人、家族を待っている



ただいま！お帰り。どうだった！？

二位！？すごいじゃん！…さすがひかり！！いやあ、こう、漏れ聞こえてたピアノの感じを聞くに、それぐらいの実力はあると思ってたよ！！…ん？どうしたの？

ああ、そっか。そうなんだ…

いや、二位って十分すごいじゃん！！

ね、ひかり？もし悔しかったらさ、また次回頑張ればいいしね？

ああ、ほらもう、泣かないで。

雄一郎、ひかりに突き倒される。

両親、それをとがめない。

あ、痛っ

ひかり、自分の部屋に走っていく

雄一郎、両親からお土産のようなものを手渡される。

ん…？お寿司？ありがとう！

お父さんたちは？あ、そう？じゃあ、独り占めだ。

現在

いやあ、若さ故のあやまちだな…。認めたくねえ…。

なんか、こう、気持ちの方がお祝いムードになっちゃってたから…。まさかひかりがあんなに向上心に溢れているとは。

申し訳なかった！！あの後しっかりお叱りを受けたが、それはもうそうされてしかるべきだ！

あの日の僕は深い反省と――深い反省をし、一人きりの自室で味のしない寿司を口いっぱい頬張りました。

いやあ、今でもあの時のことを夢に見ます。

味のしない米粒はまるでたくさんのウジ虫が這っているようで、それを噛み潰して飲み込んど、作業的に繰り返していくうちに、つーっと、そう、つーっと頬を温かい水が。頬張って頬が張っているから少し弧を描いて、つーっと。多分しょっぱかったんだと思います。

……そうだ。

その時です！

体がかくーんと重くなったかと思うと、そのまま布団にばたんと倒れこみ口の中に含んでいた寿司をべえっと吐き出してしまいました。ペースト状になった米と魚を見ながら、ああ、全然ウジ虫じゃないみたいにかえたことを、今でも覚えています。

それでそのまま数十分。身じろぎ一つできないまま、目の前のペーストをジーっと眺め続けていました。

ふと、寿司の入っていた折箱に目が行きました。全部食べたー！食べて吐いたと思ってたんですけど、実は端の方にデザート用の切ったリンゴが残っていたらしく。

男、這って折箱に近づき、リンゴを食べる

多分、もったいない、とか、申し訳ない、とか、ちょっとでも食べておけば怒られないぞ、とかそういう理由だったんだと思います。

ご飯じゃなくて、食事じゃなくて、体の中に入れるだけ。そう強く思いながら必死に飲み込みました。

無音

雄一郎、変身のポーズをし、聞こえるか聞こえないかの掠れ声で「へ

・んし・ん」と零す。

そのまま劇場の空調音だけが響く。

そこで、僕は、「この四畳半を守るヒーローになる」と言う、気付きを、得ました。

その瞬間僕の全身にすさまじい活力と！！すさまじい！！すさまじい……、とにかくすさまじい……何が溢れ始めたのです！それが、この佐竹雄一郎覚醒の時だったのです！！

雄一郎、そのままゴロンと寝転がる。

これが、僕のオリジンです。

いやあ懐かしい。懐かしいなあ。

どうですか、こう聞くとなんか、こう、「あ、こいつヒーローかもな」って思えてきたでしょう？

ほら、ここ見てください、あの時の名残が。吐瀉の名残、通称としやごりがあります。

（遠くを見つめながら）あの日の出来事が、きっと今の僕を作っているんです。

雄一郎、急に我に返ったような、（所謂「リアル」な）生々しい喋り方になる。

ああ、そっか

男、外の食器の所に行き水を持ってくる。

男、本棚のところにおいていた、薬を取る。

男、生々しく、実生活の臭いがする動きで、その薬を飲む

男、今まで自分が踏みつけにしていたせいですっかり平たくなった布団に入る。

オーケーグーグル。∞時に起こして。

「8時にアラームを設定しました」と帰ってくる。

オーケーグーグル。10時に起こして。

「10時にアラームを設定しました」と帰ってくる。

（かなり間を開けて）オーケーグーグル。8時のアラーム取り消し。

「はい、8時のアラームをキャンセルしました」と帰ってくる。

男、間を空けて「あーー!!」と叫ぶ。

その後、無音を怖がるようにわざと深く早い呼吸をする。

しばらくしてゆっくりと眠りにつく。

【五】

深夜

今まで聞こえなかったはずのの部屋の環境音が響く。きっと男にはそう聞こえている

男、急に動悸が激しくなり目が覚める。

その後何に対しても分からない罪悪感が急に湧いてくる。

手足の先が寒く、寂しく感じ、体を丸める。

その時敷布団と一緒に巻き込んでいたせいかわ、傍からみた楕円の球体のように見える。

鼓動によって一つの体勢でいることが難しく、さりとして立ち上がるのが難しいほどパニックに陥ってしまい、苦し紛れで飛び上がるように足を伸ばしたり、突き倒すように手を伸ばす。

それでも一向に動機は収まらず、呼吸も浅くなってくる。先ほどのわざとらしい呼吸とは違う、本当に苦しい呼吸になる。

罪悪感に耐えられなくなり、痛いときに「痛い」と言うように、「ごめんなさい」とつぶやく。何度もつぶやく。

すると、だんだんと動悸が収まる。

男、それを「ごめんなさい」と言ったからだと思う。

実のところ、ただの時間経過によるものである。

最近、濃い、とても濃い夢を見るんです。

僕が、いなくなったせいで全部が台無しになる。

全部が台無しになって、……ざまあみろと思う。

パズルのピースは一つでも掛けたらだめなんだ。全部大事しないといけないんだ。

そういうことを思う。多分、嬉しくて。

思っていたら、台無しはいつの間にかなんでもなくなってる。

僕がいまま色んな事が回り始める。

………世界の仕組みなんてものがあるとして、それは歯車みたいな形のあるものじゃなくて、粘土とか水とか、なんかそういう、「どうとでもなる」もので動いている気がする。気がしてしまうのが、つらい。

男、先ほどとは違う理由で身をよじらせ、縮こまる。

よく見ると震えており、どうやらかなり力をこめて縮こまっているようだ

しばらく見ていると、ふっと力が抜けたかのように眠りにつく。

翌日

グーグルホームから、目覚ましの音楽が流れる。

しばらくして、目を覚ました雄一郎が「オーケーグーグル、アラームを止めて」と言い、音楽が止む

雄一郎、しばらく布団の中でもぞもぞしたかと思うと、のそのそと布団を被ったまま立ち上がる。

朝が来ました……

いやあ、しんどい。実は僕、朝がめちゃくちゃ苦手ですて。

なんというか、体がオンになりにくいんですよねえ。

まあ、ヒーローたるものそんな腑抜けたことは言っちゃられないんですけど。僕がこうやってもそもそと起きているこの瞬間にも、社会ではたくさん人間がその大きな営みを成り立たせるために必死に動き回っているというのに、この四畳半という空間だけしか任されていない僕みたいな者が、辛いしんどいと言っていられましょうか。

雄一郎、言いながら部屋の外に出て扉の前に置いてあったお盆を持つてくる。

それを布団の上に置いて、胡坐をかきながらお盆に寄せられていたバナナを小さな

一口で少しずつ食べ始める。半分ほど食べたところで食べるのをやめ、ゆっくりと

盆の上に置く。ほんの一瞬ぼうつとした後に同じく盆に乗っていたカップのヨーグルトを二、三口だけ食べ、「ごちそうさま」と言う。そして本棚の所においてある薬を取り、コップの水で飲む。そして気だるげに服を脱ぎ、体に肌荒れ用の軟膏を塗る。

そうこうしているうちにインターホンが鳴り、少ししてそれに対応している母親の声が聞こえる。

雄一郎、自分を見られたらどうしようという気持ちになって身がすくむ。

この声には聞き覚えがあります。

親戚のおじさん。ええっと、具体的にどういう関係かは忘れましたが、親戚のおじさんです。

僕のヒーロー業について不安を抱えている両親の相談に乗ってくれていて、るらしく、大体月に2、3回ほどやってきます。

雄一郎、少しだけ身を丸めて気分を落とす

おじさんは、その、悪いことではないんですが、なんというか、その、遠慮のない人で、僕のこのヒーローとしての色々に関して、こう、色々と忌憚の無いコミュニケーションをとってくるんです。

彼なりのコミュニケーションだと解ってはいますが、それが僕に対して成立するかどうかと言いますと、何とも言い難く……………

雄一郎、おじさんとの会話を思い出して身震いする

とにかく、彼とは会いたくありません。

今日ではできるだけ静かに過ごして、この部屋にやって来ないことを願いますよう。

雄一郎、言いながらお盆と食べ残しを部屋の外に置く  
少しすると、もう一度インターホンが鳴る。

先ほどと違って2、3人やって来たらしく、少しがやがやしている。

やけに来客が多い日だ。

何かあるんでしょうか。まあ、部屋の外のことですし、僕には関係ないですが。

……………何しようかな。

実は僕、スマホとかそういうの持っていないですよ。

以前変身してテンションが上がっちゃったときに色々をやっちゃって。没収されたんですよ。この部屋で残った電子機器は両親がそういうものに詳しくないからお目こぼしをいただけた、このグーグルホームのみです。

……まあ、ある意味ではいい経験だったのかもしれない。お前と出会えたんだから。な？ふたりエッチ。

雄一郎、言いながら本棚に手を伸ばし、適当な漫画を取る。

何冊かパラパラと呼んだあと、一冊だけ手に取り寝転がって読み始める。

しばらく読んでいると、下から大きな笑い声が聞こえる。

「自分のことを笑っている」とまではいかないが、その輪に自分が入ることはないことを思っ、漫画を読む手が止まる。

少ししてまた読み始めると、今度はさっきより少し弱めの笑い声が聞こえてくる

その声を振り切るように本を閉じ、下手なフォームで腕立てを始め、10回にも満たない回数でやめる。何かの合図とすることで、声を認識しないようにするために。

再度笑い声が聞こえる。今度は「いやいやいやいや」となんだか会話めいたものも形になって耳に入る。

男、また腕立てをはじめ四回くらいでやめる。

その後、数度にわたって笑い声が聞こえ、その度に腕立てをするが、引きこもりにそんな体力があるわけもなく、ぺたんとへたり込んでしまう。



男、無力感と何物にもぶつけ難い怒りが込みあがってきて、身もだえをする。

そのままでは下に音が響くとも思ったのか布団を被る。

その動きはなんだか虫のようである。

男、「やりたかったこと」を思い出す。

自転車。

妹を撫でる。

バスケットボール。

恋人を作ったり。

大学受験をしたり。

それらを布団の中で再現する。

実際にそれらが出来ていたとして、上手くいったという保証はない。

それでも、「もしも」というフィルターで過剰に美化された頭の中で、男はそれらを完璧にこなし、得られなかったものをすべて得る。それがかえって男をみじめにさせる。想像の中でどこにも行けるということが、想像の外ではどこにも行けないということを強調する。

友人と飲みに行く。

就職する。

恋人と同棲する。

結婚する。

別にそれを望んでいたわけではないが、社会に出ず閉じこもった男にとってはそこで行われる営み全てが上等な物のように思える。

男の人生が不条理な物であったと断ずることはたやすいが、「不条理である」と言うことだけですべての説明がついてしまうのも、また都合がよすぎると、男自身が思っていた。つまり男は、「理由」に対して潔癖であった。

男、枕に顔を押し込み、依然布団の中で「あー」と叫ぶ。

【七】

息が切れ「やりたかったこと」の間が開いた瞬間、下からピアノが聞こえてくる。

昨日の、確認するように足を止めながら弾くようなものではなく、もたついたりしながらも一曲を弾き切ろうとするような演奏だ。

男、それが耳に入った瞬間に布団を頭から取り、衣擦れの一つも許さないほど動きを止める。

しかしちょうど一曲が終わるところだったらしく、すぐに曲は止まり、まばらに拍手が起こる。

男、布団や枕で音を消しながら拍手をする。

ちゃんと、聞きたかったなあ

しばらくじっとしていると、また別の演奏が聞こえてくる。

男、呆然としながらも徐に動き出し部屋のドアを開け、また部屋の中に戻る。演奏を聴くのに戸が邪魔だったのだ。

盗むような聞き方をしているという情けなさもあるが、それ以上に、嬉しい。

ピアノのすばらしさに感動するように頷きながら、とても嬉しそうに聞く。

男、急に体に活力が湧いてくる。

雄一郎、変身ポーズをとる。

（へ・ん・し・ん）

雄一郎、部屋中をひっくり返すように何かを探す。

自分がこの部屋のヒーローであることなど忘れている。

この後も、ここで暮らすことは考えていないようだった。

しばらくして、どこから筒状のウェットティッシュを取り出す。

そして、強く、強く、手を拭き始める。

ちょうど拭き終わったころ、曲が終わる。

また先ほどのように拍手が聞こえてくる。

雄一郎、それを書き消すように、大きな大きな、年下の家族に向けるような「大丈夫だよ」という気持ちがかもった拍手をする。

雄一郎、次の曲が始まるのを聞きながら、動くのに慣れていないような歩き方で、外に出る。

とある日

数日、あるいは数年後。

あの日に散らかした物がすべて一か所に寄せられている。片づけられないのだろう。

男がのそのそと重い足取りで布団から出る。

部屋のドアを開け、外から食事を持ってくる。

それをかなりの時間をかけて食べ終える。

そして、盆に寄せられていた薬を飲む。

以前見たときよりその量、あるいは種類は増えている。

飲み終え「ごちそうさま」と言った後に、床に適当においてあった軟膏を取り出して体に塗る。

終わり

## 【登場人物】

佐竹雄一郎

引きこもりの男。自称ヒーロー。本気で自分のことをヒーローだと思っているわけではない。

今の状況をユーモアや物語で包むことによって、かろうじて自己を安定させようとしている。

自己開示をすることで他人から同情されようとするが、それがどれだけみじめなことなのかも自分でわかっている。だからユーモアで包み、言葉の端々に「自分のせいでもある」と含める。

今回の雄一郎と客との関係は、客をそのままインターネットと置き換えてもいい。正鵠を射ようとするなら、ネット掲示板と言うのが正しいかもしれない。

自己開示によって憐憫を集め、それをユーモアによって包むことで承認を獲得し、そのうえで現実の奇跡（妹の演奏）によって改善の一手手前まで来たものの、家族の拒絶によってそれは失敗に終わる。

つまり、この物語は（演出によってニュアンスは変わる可能性もあるが）「躁鬱の寛解の失敗」の比喩とも言える。